

2024 年度 前期

個別学力検査

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は 24 ページあります。解答冊子には解答用紙 5 枚が綴じられています。
3. 試験時間は 90 分間です。
4. すべての解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください(氏名は記入しないでください)。
5. 問題冊子と解答冊子に印刷不鮮明や落丁などがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
6. 試験中に気分が悪くなったときは、手を挙げて監督者の指示に従ってください。
7. 問題冊子は試験終了後に持ち帰ってください。ただし、無断で複写、複製、転載などを行うことはできません。

個別学力検査

国

語

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国語の解答はすべて解答用紙に書くこと。

第一節

そもそも、なぜ、私たちには友達が必要なのだろうか。

生物として生きるだけなら、私たちに友達はいらない。食事やス^あイミンさえしていれば生きることができるからだ。その意味において、他者と友達になることは、生物として生きている限り不必要なこと、いわば余分なことである。

もちろん、人間は単なる生物ではなく、社会的な生き物でもある。社会生活をする上ではやはり友達が必要だ。そのように考えることもできるかも知れない。しかし、インターネットの発達によって、そうした

a

も崩れつつある。

たとえば、哲学者の東浩紀^{あずまひろき}が指摘するように、私たちは「シヨセキ^いを買うときに、あるいは週末に行く映画や美術展を選ぶとき」に、友達の意見を聞くのではなく、まず情報をインターネットで検索する。それは、友達の意見よりも、ネット上の情報の方を信頼しているからだ。東はこれを「友情と信頼の対立」と呼ぶ。つまり私たちは、顔の見える友達よりも、「顔も名前も知らない無数の人々の消費行動から^うチュウシュツされた、巨大なデータベース」の方を信頼しているのである。

これまで友達に頼ってきたことのほとんどが、インターネットによって代替できるようになる。私たちは、たとえ一人も友達がいないかったとしても、普通に生活することができる。したがって、社会生活の面から考えても、友^あ達はもはや不必要であるということになる。

それでも私たちに友達は必要なのだろうか。それとも友達は、人生の嗜好品^{しこうひん}のようなものであり、なくても困らないもの過ぎないのだろうか。

こうした疑問に対するアリストテレスの考えは明確である。すなわち彼は、それでも人生に友達は必要である、と答えるだろう。彼は次のように述べている。

たとえばかの善をすべてもっていたところで、友人がいなければだれも生きてゆこうと思えないものである。なぜなら、富んだ人々にも、支配的地位や権力を保持している人々にも、友人はもつとも必要なものだと思われるからである。

（『ニコマコス倫理学』）

善——すなわち私たちにとって価値があるものには、様々なものがある。経済的な豊かさや、社会的な地位もそうした善のうちの一つである。友情もまた同様だ。しかし、友情には他の善とは異なる特別な価値がある。それは、友情がなければ、他の善は色褪^あせてしまうということである。どんなに経済的に豊かでも、どんなに社会的な地位を手に入れても、友達が一人もいないのであれば、それは取るに足らないものだろう。誰からも相手にされず、誰とも親しく話ができないのなら、好きなものを買っても、自分に

b

人がたくさんいても、人生は無意味なのだ。

生物として生きるだけなら、社会生活を営むだけなら、友達が必要ではないかも知れない。しかし人生を有意義にするために、友達が必要である。それがアリストテレスの基本的な立場である。

第二節

人生には友情が必要である。では、そのとき友情とは何を意味しているのだろうか。

アリストテレスは友情を一つの愛として説明する。友達を愛することが友情なのだ。ただし、これではまだ説明になっていない。私たちはどのように友達を愛するのだろうか。またなぜその友達を愛するのだろうか。

アリストテレスの考える愛は、決してすべての人間を普遍的に愛することではない。私たちには、友達として愛することができる人と、愛することができない人がいる。両者を分けるものは何だろうか。それはその人が、愛されるに値する何かを持っているか否か、ということに他ならない。私たちは、その何かを持っている人を愛するのであって、それを持っていない人は愛さないのである。

それでは、愛されるに値する何かとは、具体的には何だろうか。アリストテレスはそうした価値として三つのものを挙げている。すなわち、「快樂」「有用さ」「善良さ」である。友情とは、相手が持つこれら三つの価値を愛する関係である。そうである以上、友情そのものも、それが相手の何を愛するのかによって三種類に分けられる。すなわち、「快樂に基づく友情」^(B)「有用さに基づく友情」、そして「善良さに基づく友情」だ。

快樂に基づく友情とは、相手といることが快樂であるような関係である。ここでのいう快樂とは、一緒にいて楽しい、愉快だ、気持ちいい、といったような意味である。特に何かがあるわけではないが、その人といるといつも笑っていて、イゴゴチがよく、他愛のない話ができる。気を遣わず、リラックスしていられる。そうした友達と交わされる友情は快樂に基づくものである。たとえば、教室のなかでふざけて大笑いするだけの友達、一緒にごはんを食べる友達、居酒屋で愚痴を言い合うだけの友達などは、このタイプの友情だろう。

有用さに基づく友情とは、何らかの目的を達成するための手段として、仲良くしている相手との関係である。ビジネス上の友達と言うこともできるかも知れない。たとえば、勉強を教え合うための友達同士は、テストで良い点を取る、という目的のために相手と仲良くしているのであり、その意味では友達を役に立つものと見なしている。また、会社のなかでプロジェクトのメンバー同士が互いを「戦友」のように扱う場合も、このタイプの友情に該当するだろう。ただし、その関係があくまでも相互的なものでなければ、そこに友情と呼ばれるような関係は成立しないだろう。

善良さに基づく友情とは、相手の善良さに惹かれ合うようにして結ばれる関係である。善良さとは、その人自身がもつ優れた性質であり、タクエツ性や「徳」と言い換えることもできる。平たく言えば、その人のその人らしさ、その人の個性、その人のオリジナルなミリオク^(カ)のようなものだ。たとえば思慮深い人同士が、互いの思慮深さに惹かれ合って交わす友情は、思慮深さという互いの善良さに

c

関係性である、と考えることができる。一般に、親友と呼ばれる友情関係はこのタイプに該当する。

第三節

たとえば、「私」にとって快樂に基づく友情を交わす友達として、一緒にごはんを食べる食事友達がいるとしよう。その友達は、「私」よりも勉強の成績は悪く、また正直に言っただけかなり性格が悪いかも知れない。そうすると、この友達は「私」にとって何かの役に立つとは思えないし、また優れた人として尊敬できるわけでもない。つまり、有用さと善良さを欠いているのである。しかし、言い換えるなら、そうした要素がなくても快樂に基づく友情は成立するのである。

I、有用さに基づく友情を交わす友達として、テスト前に一緒に勉強する友達がいるとする。「私」のテスト友達は、普段からかなりの無口であり、一緒にいても話題に^(き)つまることが多く、正直に言っただけ愉快な気分にはならないかも知れない。また、自分の成績が良すぎるためか、成績が悪い人を見下す傾向があり、

d

人を馬鹿にする言葉を口にする。

しかしノートは天才的に整理されており、先生よりも学習内容の説明がうまい。このような人と友達であるとき、「私」はその有用さを愛しているのであって、その友達に快樂や善良さはそもそも期待していないのだ。

ただし、アリストテレスの考えでは、快樂に基づく友情と、有用さに基づく友情は、ともにある限界を抱えている。それは、

甲。快樂に基づく友情において、「私」はその友達と一緒にいることで得られる楽しい時間を愛しているのであって、その友達自身を愛しているのではない。また、有用さに基づく友情においても、「私」はその友達がそれに対して役に立つところの目的を愛しているのであって、やはり、友達自身を愛しているのではない。したがって、そうした価値がなくなれば、その人と友達でいる理由もなくなってしまうのである。

II、快樂や有用さは、時間の経過とともに簡単に失われてしまうものである。いつも一緒に愉快に食事をしていた友達に、ある日恋人ができれば、様子が一変して以前のように楽しく話せなくなるかも知れない。テスト勉強を教えてもらっていた友達にも、やはり恋人ができて、まったく勉強しなくなってしまうかも知れない。そうなれば友情は解消の危機にさらされる。この意味において、快樂に基づく友情と有用さに基づく友情は、ともに^(く)コワレやすい友情であり、その意味において不完全である、とアリストテレスは考える。

第四節

III

、快樂や有用さは簡単に失われてしまうのだろうか。アリストテレスによれば、それは、こうした価値がその人自身に備わるのではなく、あくまでも後から付け加わるもの、二次的で副次的なものに過ぎないからだ。アリストテレスはこのような性質を「付帶的」と呼ぶ。⁽¹⁾ 付帶的な価値とは、その人がその人自身であることに影響を与えない価値である。たとえば食事友達は、たとえ恋人ができて付き合いが悪くなっても、人間としては何も変わっていないだろう。「私」とって、その友達と一緒にいることが楽しくなろうが、それはその友達がその友達自身であることと関係ないのだ。

IV

、アリストテレスによれば、善良さは決して付帶的ではない。その人の長所や個性は、まさにその人自身のものであつて、簡単に失われることがないからだ。したがって、善良さに基づく友情は時間が経過しても簡単には失われない。アリストテレスは次のように述べる。

愛^{フィリア}として完全なのは、善き人々のあいだ、つまり徳^{アレテ}の点で類似の人々のあいだに成り立つ愛^{フィリア}である。なぜならこの人々は、かれらが善き人であるかぎりにおいて、互いに同じ仕方で互いの善を願うのだが、ここでかれらが「善い」のは、かれら自身に基づいてのことだからである。「∴」それゆえ、かれらの愛^{フィリア}は、かれらが善き人であるというそのかぎりにおいて持続してゆくのである。そして徳^{アレテ}こそ、安定した持続性をもつものなのである。

(『ニコマコス倫理学』)

たとえば、思慮深い徳を備えた人は、どんなときでも思慮深い。たとえ恋愛をしても、そうした人は思慮深く恋愛をするのであり、善良さが急変することは考えられない。そのため、善良さを相手に求める友情は、その価値が相手から失われる危険が少なく、友情が e 可能性ももっとも低い。この意味において、善良さに基づく友情は「安定した持続性」を持つており、したがって「完全」なのである。

V

アリストテレスは、だから私たちは善良さに基づく友情だけを目指すべきであり、不完全な友情などは交わすべきではない、と考えていたわけではない。彼は、快樂に基づく友情や有用さに基づく友情にも、友情としての価値を認めている。また、これらの友情は確かに不完全ではあるが、しかしだからといって、常に風前の灯ともひのように、次々と簡単に解消されていくわけでもない。アリストテレスによれば、もしも「私」が、相手に求めている価値と同じものを提供し続けることができるのなら、「私」はその友達と持続的な関係を築くことができる。

たとえば、快樂に基づく友情なら、「私」も食事中に友達が楽しめるように(イ)氣遣きづかいえる限り、また有用さに基づく友情なら、「私」も友達のために見事なノートを作って見せるのである限り、たとえ不完全であつたとしても、友情を温め続けることはできるのである。

第五節

とはいえ、完全な友情^(C)と不完全な友情を比較するなら、当然、完全な友情の方が望ましい。そう考えるのが自然だろう。では、善良さに基づく友情を交わすには、どうしたらよいのだろうか。前述の通り、それは善良な人間の間で成立する友情である。そうであるとして、そもそも、どのような人間が善良なのだろうか。

善良さとは個性であり、長所である。ただしそれは何の努力もなしに現れるものではない。アリストテレスによれば、善良さはもともと人間が持っているものであるが、しかし、何らかの活動を行うことによって、はじめて発揮されるのだ。

たとえば「私」の善良さが思慮深さだしよう。しかし、何もしないでいたら、そうした思慮深さは発揮されない。たとえば寝る前に一日を反省してみたり、明日の行動計画を立てたりするときに、その活動に伴って思慮深さが現れてくる。その一方で、このような善良さの発揮を妨げる活動も存在する。たとえば毎日アルコールを飲んでいたら、どんなに「私」が思慮深くても、それは発揮されなくなってしまうだろう。

したがって、善良さを発揮できるためには、自分の善良さが何であるかをハア(け)クし、そのためにどんな活動が必要かを熟知し

ていなければならない。そして、自分にとって本当に必要なことをし、必要ではないこと、有害なことは差し控えるべきなのだ。

ここからアリストテレスは非常に面白い発想を語っている。このように自分の善良さを発揮できるような活動することは、自身と友達になることに等しい、と言うのである。

「…」隣人に対して或る人がもち、しかも愛を説明する友人らしい特徴は、自分自身に対する「友人関係」に由来しているように思われる。

なぜなら、人々はまず、相手のために善もしくは善にあらわれるものを願ひ、行為する人、あるいは友人のために、その人が存在し、生きることを願う人のことを、友人と考えているからである。「…」また、友人とともに生き、友人と同じことを選ぶ人、もしくは友人と同じ苦しみを味わひ、同じく喜ぶ人を友人であるとする人々もいる。「…」

しかし、これらの特徴のそれぞれは、高潔な人の場合に、自分自身との関係において成り立っているのである。「…」なぜなら、高潔な人は自らと意見が一致しており、自らと同じものを魂全体において欲求するからである。そしてそれゆえ、この人は自分自身に善と、善に思われるものを願ひ、また行為する。

『ニコマコス倫理学』

つまり、善良さを発揮することができる人は、まるで友達に対して接するように、自分自身に対して配慮し、自分の善を願える人なのである。そうした人だけが自分の善良さを発揮することができる。そして、善良さを発揮している者同士が、善良さに基づく友情を交わすことができる。

そうだとすると、善良さに基づく友情は、それに先行して、まず自分自身との友情を前提にしている、と考えることができる。私たちは、他者と完全な友情を交わそうとするとき、他者を愛するよりも前に、自分自身を愛さなければならない。自分を

愛することができなければ、善良さを発揮することはできないからだ。ここにアリストテレスの友情論の独創的な点がある。すなわち、自己への友情が、他者への友情に先行するのである。

だからこそ、自分自身を愛せない人は、他者とも友達になれない。それはどういう人かというところ、自分の善良さを理解していない人、あるいはその発揮を妨げるような活動をする人である。たとえば、自分の善良さが思慮深さなのに、毎晩アルコールを飲んで、毎朝二日酔いになっている人がそうである。こうした人は、善良さを発揮できないために、他者からその善良さを愛されることもなく、したがって善良さに基づく友情を交わすことができない。友達はできるかも知れないが、それは、常に不完全な友情に留まってしまうのである。

第六節

このように自分を友達にできる人は、善良さを発揮するために、他者の助けを必要としない。つまり、他者に依存することなく、常に自分自身であり、また自分自身のために生きることができる。アリストテレスによれば、このような状態にある人は幸福である。したがって、自分と友達になるということが、人間が幸福であるために重要なのである。

ここで次のような疑問が生じたとしても不思議ではない。すなわち、そうであるとすれば、なぜ私たちはわざわざ他者と友達になるのだろうか、ということだ。なぜ、自分と友達であるだけでは飽き足らず、その友情を外へと広げなければならないのだろうか。もしもアリストテレスの主張が真実であるとしたら、そのとき、人間は自分自身を友達にすればそれで事足りるはずだ。そうである以上、他者と友達になる必要はないのではないか。それでも他者を友達として必要とするなら、それはその友達に依存しているのであって、自分自身に充足する幸福な状態に、傷をつけるようなことなのではないか。

このような疑問に対して、アリストテレスは次のような興味深い回答を示している。たしかに私たちは自分自身を友達にすることができれば幸福である。しかし、その幸福をより望ましいものにするために、他者と友達になることが必要なのである。どうということだろうか。

前述の通り、自分自身と友達になるということは、自分の善良さを発揮するために必要な活動をする、ということだ。したがって幸福もまた活動のなかにある。アリストテレスにとって幸福とは、何もしていないときにしみじみと感じるものではない。ところが私たちには、活動をしている最中に、そのように活動している自分自身を反省することができない。言い換えるなら、自分を認識することができないのである。

活動するということは何かに働きかけるということだ。それに対して認識する²⁾ということは、対象に働きかけることなく、その対象から距離を取って、それを眺めることである。アリストテレスはそうした働きを「観照」と呼ぶ。活動と観照は対立する。したがって私たちは、たとえ活動によつて幸福になるのだとしても、自分がそのように幸福であるということを認識できないのである。

たとえば、思慮深さを善良さとする「私」が、その思慮深さを活かして明日の行動計画を練っているとしよう。その活動をしているとき、「私」は自らの善良さを発揮しているのであり、その意味で幸福である。しかし、そのように明日の行動計画を練っている「私」は、自分の姿を反省することができない。「私」は明日の行動計画の方に集中しているからである。だから、実際には幸福であるにもかかわらず、自分が幸福であることに気づかないのである。

もちろん、自分が幸福であることを認識できないのだとしても、幸福であること自体はよいことだ。しかし、それを認識することができたら、その幸福はもっと味わい深いものになるだろう。したがって幸福な人にとつて、自分が享受^エしている幸福を認識することは、より望ましいことなのである。しかし、活動と観照が対立する以上、それは原理的に不可能である。では、どうしたらよいのだろうか。

これに対してアリストテレスが提案するのが、自分と同じ善良さをもった友達の姿を眺めることである。たとえば、思慮深い「私」が、自分と同じように思慮深い他者の姿を眺めるとき、「私」はそこに自分と相通じるものを感じ取る。その人にとつて、その他者を眺めることは、自分自身の善良さを眺めることと同義である。そしてそれによつて、その人は自分自身が幸福であるということ、その他者を鏡にして、認識することができるのだ。

第七節

アリストテレスによれば、だからこそ、善良な人間は自分と同じ善良さをもつ人間を愛する。それは、他者の善良さそのものを愛するのではなく、そうした他者の善良さのうちに、自分自身の善良さを認識するからである。したがって「友人であるすぐれた人々の行為は、善き人々にとって快いとする」のであり、「至福な人はこの類いの「徳ゆえの」友人を必要とするだろう」と彼は述べる。

つまり、私たちはまず自分自身と友達になるべきであるが、しかしそうした友情をより望ましいものにするためには、自分に似た他者と友達になる必要があるのだ。この意味において、友達とは単なる他者ではない。アリストテレスによれば、それは、⁽³⁾「もう一人の自分」なのである。

理想を言うなら、もっとも完全な友情とは、友達と「私」がまったく同じ善良さを持っているような友情だろう。そしてそれは、「私」と友達が一心同体になるような友情である、とすることができるかも知れない。そんな極端な友情が、果たして現実にあるのだろうか。

たとえば、春秋戦国時代を題材にした原泰久の漫画、『キングダム』の物語では、そうした友情が描かれていると言えるかも知れない。主人公の少年・信は孤児であり、同じく孤児の少年・漂とともに、使用人のような身分で働かされている。しかし、二人はいつか士官して出世し、將軍となつて世界に名を轟かせたい、という夢を抱いていた。

ある日、陰謀に巻き込まれた漂は、何者かによって斬られてしまう。今際の際で、「二人で天下の大將軍になるつつたじゃねえかよ!!」と叫ぶ信に、漂は次のように答える。

なるさ!

信

俺達は力も心も等しい

二人は一心同体だ

お前が羽ばたけば俺もそこにいる

信…

俺を天下に連れて行ってくれ

そう言葉を残して、漂はこと切れてしまう。

信は、この漂の言葉を胸に宿し、軍隊に士官して將軍への長い道を歩み始める。彼は、自分一人のためではなく、漂に將軍の景色を見せるために、その夢を叶えようとするのである。

このとき、信と漂は互いを同一視しているのであり、二人は一心同体の存在である。だからこそ、漂の肉体がホロ^(c)びても、信のなかに漂は生き続ける。そのことを、信も漂も互いに了解しているということが、二人の友情を強固で、完全なものにしているとと言える。

なぜ、二人は互いを一心同体だと思えるのだろうか。おそらくそれは、信と漂が、互いに低い身分に耐えながら、日々欠かさずに訓練を積み重ね、やがて將軍になるという大志を抱いているということ、そうした勇氣や希望を持つ点で、よく似ていたからではないだろうか。だからこそ漂は信のうちに自分自身を見出すことができたのだ。

アリストテレスの友情論は、こうした二人の友情を理解するための、一つの手がかりを提供してくれるものだろう。

(戸谷洋志『友情を哲学する』 問題作成にあたり表記の一部を改めた。)

(注1) 東浩紀——哲学者(一九七二—)。

(注2) アリストテレス——古代ギリシアの哲学者(前三八四—前三二二)。

(注3) 原泰久——漫画家(一九七五—)。

問題Ⅰ

次の問いに答えなさい。(配点20点)

問一 傍線部(ア)～(オ)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

(ア) 該当

(イ) 氣遣える

(ウ) 高潔　

(エ) 享受

(オ) 陰謀　

問二 傍線部(あ)～(こ)のカタカナを漢字で書きなさい。

(あ) スイミン
(か) ミリヨク

(い) ショセキ
(き) ツまる

(う) チュウシュツ
(く) コワれ

(え) イゴコチ
(け) ハアク

(お) タクエツ性
(こ) ホロび

問三

空欄

a

ゝ

e

欄の記号を○で囲みなさい。

に入る最も適当なものを、それぞれの選択肢(1)ゝ(5)から一つずつ選び、解答

a

(1) 見識
(4) 良識

(2) 知識
(5) 博識

(3) 常識

b

(1) たてつく
(4) へつらう

(2) なだめる
(5) さいなむ

(3) つけいる

c

(1) 見捨てた
(4) 仕立てた

(2) 近寄った
(5) 根差した

(3) 世慣れた

d

(1) 折に触れて
(4) 譲り受けて

(2) 取り残して
(5) 付け替えて

(3) 呼び慣らして

e

(1) 完成される
(4) 再現される

(2) 解消される
(5) 根絶される

(3) 提案される

問題Ⅱ

次の問いに答えなさい。なお、論述式の問いでは、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。(配点55点)

問一

空欄

I

く

V

に入る語句として、最もふさわしいものは何か。次の(1)く(5)から一つ選び、

解答欄の記号を○で囲みなさい。なお、同じ選択肢を複数回選んではいけません。

- (1) これに対して
- (2) もつとも
- (3) 一方
- (4) なぜ
- (5) そして

問二 波線部(A)「友達はもはや不必要である」とある。それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○で囲みなさい。

- (1) 現代社会においては、巨大なデータベースから容易に情報を得ることが可能であり、友達は、もはや生物として生きている人間である必要はないから。
- (2) ネット上での炎上によって友達を失うことがあるように、人間は単なる生物ではなく、社会的な生き物でもあるといった昔の考え方は、すでに崩れてしまったから。
- (3) 人間は、孤独であることを逃れられず、たとえ一人も友達がいないとしても、寝たり食べたりすることさえできれば、普通に生活することができるから。
- (4) 顔も名前も知らない無数の人々が織りなすインターネットを頼りに、私たちが普通に暮らしていけるならば、友達は、なくても困らないものに過ぎないから。
- (5) 友達は、人生を意味にするために必要であり、友達が一人もいないのであれば、私たちにとって人生は取るに足らないものになってしまうから。

問三 波線部(B)『快樂に基づく友情』『有用さに基づく友情』、そして『善良さに基づく友情』とある。それらの説明として

最も適当でないものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○で囲みなさい。

- (1) 快樂に基づく友情における「快樂」とは、一緒にいて楽しい、愉快、気持ちいいという意味である。
- (2) 有用さに基づく友情における「有用さ」とは、何かの目的を達成するための手段として、相手を役に立つものとみなすことである。
- (3) 有用さに基づく友情の例として、自分がテストで良い点をとるために一方的に勉強を教えてくれる相手と仲良くすることがあげられる。
- (4) 善良さに基づく友情の例として、思慮深い人同士が、互いの思慮深さに惹かれあつて交わす関係性があげられる。
- (5) 善良さに基づく友情の関係性には、一般に、親友と呼ばれる友情関係が該当する。

問四 空欄

甲

に入る文として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○で囲みなさい。

- (1) 快楽と有用さのどちらも、「私」と友達が友情を交わすために必要であり、一方が欠ければ友情を続けることができないということだ
- (2) この二つの友情においては、「私」と相手が一緒に楽しい時間を過ごすという目的を果たさなければならないということだ
- (3) 「私」にとって、快楽と有用さに基づく友情が決して相反するものではなく、両立することが可能なものだということだ
- (4) 相手が「私」にとって快楽や有用さという価値を失ってしまったら、その友情が成立しなくなってしまうということだとだ
- (5) 「私」と相手が、お互いの優れた個性に気づかなければ、友達としての関係性が失われてしまうということだ

問五 波線部(C)「完全な友情」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選

び、解答欄の記号を○で囲みなさい。

- (1) その人が快樂、有用さ、善良さという三つの価値を全て備えてはじめて、確かなものと思われる友情。
- (2) その人の良さがその人自身に備わっており、変わらずに続く友情。
- (3) その人の行動や価値がどんなに変わったとしても、持続し育まれる友情。
- (4) その人自身の善良さによって、相手がどんな人であっても普遍的に結ばれる友情。
- (5) その人の良いところも悪いところも許すことができるために、簡単には失われない友情。

問六

波線部D「自分の善良さを発揮できるように活動することは、自分自身と友達になることに等しい」とある。それは
どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○で囲みなさい。

- (1) 善良さとは、隣人に対して或る人がもち、しかも愛を説明する友人らしい特徴のことであり、それは友達としての自分自身に由来する人間関係のなかで、相手のための善を願う活動だということ。
- (2) 善良さとは、自分自身の善を願い、その活動において発揮するものであり、そうした高潔な人は、他人に対しても自分と同じ意見を要求することで、自分自身を価値ある人間に高めるということ。
- (3) 善良さとは、相手のために善を願い行為する人、あるいは友人のために、その人が存在し、生きることが願う人に備わる特徴であり、そうした特徴は自分自身と友達に共通しているということ。
- (4) 善良さとは、自分自身を愛する人間なら誰しもが持つ能力のことであり、その人が善良さを発揮して活動するならば、他者への友情に先行して、自分自身に対する友情が生まれるということ。
- (5) 善良さとは、もともと人間が持つ個性や長所のことであり、自分に備わった善良さを発揮するためには、何が自分の善良さなのか、どんな活動において現れるのかを熟知する必要があるということ。

問七 波線部(E)「常に不完全な友情に留まってしまうのである」とある。それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○で囲みなさい。

- (1) 自分への愛を他者への愛に先行させるために、自己への配慮や善の実践に集中してしまい、常に不完全な友情に留まってしまうから。
- (2) 自分への友情を前提にしているために、他者に向ける注意や関心の度合いが低くなり、常に不完全な友情に留まってしまうから。
- (3) 自分の善良さを発揮できないため他者から愛されず、そのため互いの「徳」に基づく友情が成り立たず、常に不完全な友情に留まってしまうから。
- (4) 自分の個性を理解しているために、そのことで他者を観察して見極めようとする視野が狭くなり、常に不完全な友情に留まってしまうから。
- (5) 自分の長所を発揮することに専念して、他者の善良さによる思慮深い行動を受け入れるゆとりがなくなり、常に不完全な友情に留まってしまうから。

問八 二重傍線部(1)「付帯的な価値」とある。これを踏まえて、本文における三つの友情の違いを二〇字以内で説明しなさい。その際、「副次的」という語句を必ず用いること。

問九 二重傍線部(2)「認識する」ということは、対象に働きかけることなく、その対象から距離を取って、それを眺めることである。アリストテレスはそうした働きを『観照』と呼ぶ。」とある。ここでの「観照」を本文中の具体例を使って二〇字以内で説明しなさい。その際、「鏡」という語句を必ず用いること。

問題Ⅲ

二重傍線部③「もう一人の自分」とある。それはどういうことか。本文の内容を踏まえて、三〇〇字以内で説明しなさい。なお、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。(配点25点)



